

教育実習の女子大生におちんちんを見せつけるプールの授業

とある男子中学の夏、2年A組の教室は、7月の蒸し暑い陽気に包まれていた。プールの授業初日を待ちわびる男子たちの熱気は、単なる水泳への期待ではなく、別の理由で異様なほど高まっていた。教育実習生としてやってきた女子大生、山田弥奈がこの授業を担当するという噂が、教室中に瞬く間に広まり、思春期真っ盛りの男子たちの血を滾らせていた。彼女は21歳、大学4年生。ショートカットの黒髪が首筋で軽やかに揺れ、透明感のある白い肌が夏の陽光に映えていた。柔らかな笑顔と、時折見せる少し緊張した仕草は、男子たちの心をざわつかせていた。彼女のポロシャツ越しに見える華奢な肩と、鎖骨のラインが、教室の蛍光灯の下でかすかに浮かび上がり、

男子たちの視線を無意識に引き寄せていた。

昼休みが終わり、午後の3限目が始まる頃、教室は異様な興奮に包まれていた。窓から差し込む陽光が、机や床にまだらな光の模様を描き、扇風機の風がカーテンを揺らしていた。山田弥奈は教卓に立ち、クリップボードに目を落としながら名簿をチェックしていた。「皆さん、準備できたらプールサイドに集合してくださいね」と、穏やかだが少し緊張した声で呼びかけた。彼女の声は柔らかく、ポロシャツの襟元から覗く白い鎖骨が、男子たちの視線をそっと引きつけていた。彼女の手は名簿を握る指先にわずかに力が入り、緊張を隠そうとする様子が伺えた。教室の後ろでは、男子たちがひそひそと企むような笑い声を上げていた。サッカー部のエースでクラスのリーダー格、高橋悠斗は、がっしりした体格と自信満々の笑顔で仲間を扇動していた。「なあ、健太、

先生のことちょだとかわかってみない？」と囁き、隣の佐藤健太がニヤリと笑った。健太はクラスのムードメーカーで、悪ふざけの火付け役として知られていた。「いいね、プールの時もしもタオルなしで着替えたら、先生、どんな顔するかな？」と目を輝かせていた。

2年の山本直樹、普段は大人しく本を読むことが多いが好奇心旺盛なタイプは、「でも、さすがにやばくね？」と呟きながら、目がキラキラと輝いていた。彼の声には不安と期待が混じり、頬がわずかに赤らんでいた。お調子者の田中涼介は「やるなら俺もやる！先生におちんちん見せたい！」と拳を握り、興奮を隠しきれなかった。通常、プールの着替えでは、タオルを腰に巻いて下着を脱ぎ、水着に履き替えるのが暗黙のルールだったが、この日は違う。男子たちは、山田先生が見ている教室で、わざとタ

オルを巻かずに着替えるという大胆な計画を立てていた。